もう一度、ネイサンから送られて来たメールを見返して、徐々に浮き足立っていく感覚に身を任せるライアン。それまで彼なりに悩みつつも目をそらしてきた姿はどこにもない。
本能だ理性だの何だと言い訳して、本音を隠すため都合よく自分を誤魔化すのももうやめだ。そう切り替えたライアンの心のざわめきは、全力でハードルに臨む前の高揚感に変化した。
「いいぜぇ、何とかしてやろうじゃねぇの」
強い光を目に宿した獅子の声が静かに響き、同時に彼は動き出したのだった――。

「――俺はお前に惚れた」
懐かしき星の街への突然の来訪。バイトあがりのカリーナを待ち伏せていたライアンは、あのひったくり事件の現場となったこの路地で、周りに人がいないのをいいことに高らかに宣言した。
「ちょ、突然何言って――っていうか、何でアンタここにいんのよ！」
静かな路地に慌てたカリーナの声が響く。突然現れただけでも驚くというのに、よりによって開口一番そう言われて彼女の思考はパニック状態だ。
「アンタを落としに来たに決まってんだろ。告白なんてもんは直に伝えねぇと冗談に思われるし、初めて本気で惚れた相手に電話でなんてナンセンス」
「こ、告白って……アンタ、まさかその為だけに海越えて来たわけ？　ば、バカじゃないの！」
まるで出会った当初の頃と同じように、彼の予想外の行動に驚きジリジリと離れていくカリーナ。だがあの頃とは違い、逃がさぬようライアンが間をつめてくる。
「距離なんて関係ねぇよ。俺を初めて落としてマジな恋に翻弄されるようなバカにした、アンタ自身を手に入れる為ならな」
「そ、んなこと言って、だってアンタ、いつも冗談で軽々しく言うじゃない。それに……」
「そりゃ仕方ねぇ。今まで俺を本気にさせるやつなんざ誰もいなかったし、それで喜ばねぇ女はいなかったからな……アンタ以外」
だからこそ、今彼女に向けている感情は過去の執着など欠片も湧かなかった女達に向けたものとは違うのだと彼は言う。
「アンタなら分かるだろ？今の俺が、上辺だけの言葉を吐いてるかどうか」
確かに、あの時あの場所で唯一彼の存在に目を向け、彼の内側に気づいたカリーナにはわかる。
言葉はいつものように不躾で挑発的、だがライアンの眼差し、表情には冗談の欠片もない。
こちらを見つめる真剣な瞳からは、彼が覚悟を決めているということが伝わってくる。
「――ッ！」
不遜で唯我独尊。チャラチャラして調子が良く、そのくせ不意に見せる姿がどうしても目を惹くこの男が見せた本気の姿に、カリーナの頬へ熱が広がっていく。
「そんなこと、言われても……だって私は――！」
「おーっと待った、残念ながらイエス以外は聞くつもりねぇよ。と言っても今すぐ返事を求めやしねぇ。アンタもだいぶ一杯一杯みたいだしな」
すっと近付いた彼の手がふと躊躇うように止まった。だがやがてゆっくりと頬に触れてきた掌は、信じられないほど優しく滑り、そのままぷっくりとした形を確かめるように唇を撫でた。
「だからアンタが俺に落ちるまで、何度でもこうして伝えるぜ……好きだ、カリーナ」
視線の高さを合わせた至近距離での、低く優しく甘い声。本気の色の浮かぶ瞳が熱に揺れ近付いてくる。
跳ね上がる心臓。思考も理解も追いつかず硬直していたカリーナだったが、何をされようとしているのかに気づき逃げ道を探した。
だが背後は壁、人もいない。逃れようもなく咄嗟に目を閉じ顔を背け拒否を示せば、一瞬の間をおきふっと笑う気配とともに、唇をむにりとつままれた。
「ふぇ？」
予測とは違った感触にぱちくりと見開かれた目が、ギクシャクとした動きでライアンのほうへ戻り――
「ん～、いい感触♪　……言ったろ？　大事な部分はアンタが俺に落ちた時のお楽しみって」
――その顔が、いつかと同じように爆発した。
「っ！　バカッ！」
振り上げられた手、軽快な音をたて弾かれた頬。あの時とは違い直撃した彼女の掌。
「おっほ！　ナーイスビーンタ！」
「あっ……何で、アンタなら避けられたでしょ！」
自分でやっておきながら戸惑うカリーナの通り過ぎた掌はあの時と同じように掴まれ、包んだ指から彼女